

## 西湖図、秋月等観（1496年）作

中国杭州にある西湖は、唐の時代（618-907）から中国の伝説や絵画、文学に登場する場所である。中国に渡った日本の使節や僧侶、商人たちは、旅の途中でしばしば杭州を訪れ、日本の文人たちの間でも西湖はよく知られるようになった。やがて西湖は中国の理想的な自然美を表現し、日本の詩人や画家、貴族の心をとらえた。

本図は、1496年に描かれた掛け軸で、現存する日本最古の西湖の絵である。これは雪舟等楊（1420-1502）に師事した秋月等観（年代不詳）によって描かれたものである。山や寺院、樹木の筆法が雪舟の画風に酷似していることから、当初は雪舟の筆とされていた。しかし、本図の左上隅にある款記は、その出所を示唆している。

「杭州西湖図、弘治九年（1496）三月三日、北京の会同館にて描かれた」と記されている。

1496年当時、雪舟は中国にいなかったが、秋月がいたことが記録に残っている。秋月はおそらく西湖を写生し、その後、北京の会同館に滞在しながら中国の絵画を参考にして完成させたと思われる。この碑文があることで、この作品は正しくは秋月の作品であるとされた。

橋の下には「六橋」、中央奥の北高峰と南高峰に挟まれた小さな建物の上には「靈隠寺」と、それぞれの地名が書かれている。秋月が紙面に収まるように縮めて描いたとはいえ、建物や壁がきれいに描かれ、地図のようにリアルな描写である。この写実的な描写は、絵師が自分の目で見たことを証明するものであり、作品に信憑性を与えたものであった。後世の日本画家、特に狩野派の画家たちは、この秋月の作品を手本に湖山水画を描いていった。

狩野正信（1434-1530）が開いた狩野派は、武士や貴族、足利将軍家、徳川将軍家などから支援を受け、300年以上にわたって日本画壇を支配した。狩野派の画家たちは、中国の山水画や仏教の中心人物など、中国を題材とした水墨画を得意としていた。1600年代、西湖を訪れることができなかった狩野派の画家たちは、秋月が描いた西湖を参考にしながら作品を制作していった。構図や筆法に工夫を凝らし、ある部分は強調し、ある部分は抑えるなど、それぞれの画家が独自の表現で西湖を描いた。

当館には、西湖を描いた4枚の絵画がある。秋月のほか、狩野元信（1476-1559）、狩野興以（?-1636）と狩野探幽（1602-1674）が描いたものである。後三者は、山が高くなり、建物が目立たず、雲が湖を覆い、より幽玄な雰囲気漂う。湖の様子は、圧縮されてはいるが秋月の忠実な描写に比べ、狩野派の画家たちの作品は、より芸術的な雰囲気に重点がおかれている。また、中国と日本の画風がより融合している。絵は壊れやすいため通常展示されていないが、当館のホームページで詳細な画像を見ることができる。

秋月の「西湖図」は、1950年に重要文化財に指定された。